

【書評者】
聖路加国際大学大学院
看護学研究科
萱間真美

『ゆるりとはじめる 精神科の1冊目 病気がわかる くすりがわかる』

別所千枝、中村友喜＝編著

2021年5月発行
A5・440ページ
定価：4,620円(本体4,200円＋税10%) じほう



精神科医療の仲間である薬剤師さんに、 薬のことを一緒に考えてもらおう

薬剤師さんの教育課程が6年制となり、臨床実習の時間数が増えたことは知っていました。でも、こんなに豊かな臨床でのエピソードを入口に、しっかりと「薬」に向かった視点でのアセスメントや臨床判断があることは、想像を超えていました。病棟や地域で、多くの患者さんやご家族と向き合っている薬剤師さんの活動が生き生きと見えてくる本です。

●薬のエキスパートとして

紹介されている概念や現象は最先端です。ポリファーマシー（多剤併用）、SDM（shared decision making）、ジョイニング、ストレングス、コミュニケーション、病態と疫学など、対象理解の鍵となる概念が押さえられています。質の高い実践であるほど、職種の違いに関係なく、必要な知識が共通しており、その質が問われていることを改めて感じます。

薬剤師さんは、でも薬を見えています。評者にとって本書で最も印象深かった事例は「剤

形選択の苦い思い出」というコラムでした。

OROS 製剤（薬物放出制御システムを用いた徐放性経口製剤）が溶ける様子を見てしまった被毒妄想のある患者さんが、とても怖い思いをし、その後2週間服薬を拒否しました。薬剤師さんは、あの溶け方を見せてはいけなかったと考え、処方設計を主治医と相談すべきと考える。

もしかしたら、私たちの近くで服薬を拒否している患者さんは、薬に関する怖い体験をしていたのかもしれませんが。怖くない状況はどう作れるかを一緒に考えてくれる薬剤師さんがチームにいて、主治医とも共有することができたら、きっと心強いと思います。

●著者の人柄が見える本

本書は、2人の精神科専門薬剤師がまとめた本です。巻末に、お2人の超マニアックなご趣味が紹介されており、さすが薬剤師さんと、マニアックな看護師の評者は親近感を持ちました。話したら楽しそうな薬剤師さんっていいな、と。

精